

社会医学研究会
活動報告書

2016 年度

目次

はじめのお言葉	2
みのむしの会	3
手話の会	5
なかよし保育園ボランティア	6
夏のぬいぐるみ病院ボランティア	7
冬のぬいぐるみ病院ボランティア	8
小児科学習支援ボランティア	9
花の家ボランティア	10
ホスピスボランティア	11
医大アート展ボランティア	12
I F M S A	13
A M S A	14
学祭 模擬店	16
あとがき	17

はじめのお言葉

奈良県立医科大学小児科教授
社会医学研究会 顧問
嶋 緑倫 教授

社会医学研究会（社医研）の柱は多岐にわたるボランティア活動と国際交流活動です。2016 年度も部員の皆さんは積極的に活動してくれ、顧問として非常に嬉しく思っています。

障害を持って産まれてきたこども達の療育やご家族の支援はわが国における重要な課題です。残念ながら、公的支援体制は必ずしも十分でなく、こどもたちやご両親に大きな負担をかけているのが現状です。みのむしの会は、こどもたちの発達を見守り、ご家族を支援する活動を毎月行っています。 今後は、両親の声や思いに一層、耳を傾けてこれから医療従事者が何をすべきなのか、何ができるのか、皆さんで考えてほしいと思います。手話の会も手話の単語の勉強のみならず、「聾」に関する文化や歴史的背景などにも興味を持ってくれています。これは非常に重要なことで、人とのコミュニケーション力をさらに高めることにもつながり、活動範囲をどんどん広げていってほしいと思います。なかよし保育園ボランティア活動も最近ますます活発になってきています。こどもたちと接することにより、こどもの成長を実感できます。さらに、奈良医大関係者に限定されている施設であるメリットを生かして、医学や看護学教育と一体化した新たな保育活動のモデルになるのではと期待しています。ぬいぐるみ病院も、重要なボランティア活動です。この活動は将来の医療従事者である医学生や看護学生の皆さんにとって予防医療に貢献できる体験、実践の場です。まだまだこの活動を通じてこどもたちの健康を守るためにできることがたくさんあると思います。どんどん、アイデアを出して挑戦してほしいです。小児科学習支援ボランティアは平成 26 年度から始まった社医研の中では新しい活動です。義務教育の対象外である高校生が長期に入院した場合の教育支援制度は確立されておらず、盲点になっています。これまでの活動成果を昨年 11 月に開催されました奈良県小児保健学会で発表してくれましたが、大きな反響を呼びました。この活動がきっかけになって入院しているこどもたちの教育支援の必要性についてもっと社会に発信することができればと願っています。また、昨年度は「特別支援学校と病院を結ぶ！奈良県立医科大学附属病院アート展」で社医研は会の準備から当日の司会まで大活躍でした。「花の家」に入所されている方との交流を通じて活動している花の家ボランティアは 7 年目になります。高齢者や認知症の支援は奈良県が進めている地域包括医療の重要な課題です。 さらに、奈良医大が進め

ている「地域に根ざした研究・医療」における主要なテーマでもあります。医学生や看護学生がこの課題に取り組むことは、奈良医大と地域をむすびつけるMBT(Medicine-Based Town)構想にもつながるもので、益々の活発な活動を期待しています。国保中央病院の緩和ケア病棟『飛鳥』におけるホスピスのボランティア活動も積極的に取り組んで頂いており、嬉しく思っています。これからの医療の尺度は疾患の治療効果のみならず、いかに人間らしい生活が送れるか、幸福を見出されるかの視点が重要になってきています。この活動を通じて、学べることは多々あるかと思えます。もうひとつの重要な活動の柱が国際交流ですが、AMSA では昨年度も春、秋の国内交流会だけでなくフィリピンで開催されたアジア医学生会議にも参加され、国内外の交流会交流を深めてくれました。

このように社医研の活動を通じて大学のカリキュラムや実習では得られないような、すばらしい体験ができます。その経験の蓄積がおのずと患者や家族の気持ち理解できる医療従事者としての素養を養っていくことにもなります。ひとりでも多くの学生の皆さんが社医研の活動に興味を持っていただけることを期待しています。

みのむしの会

医学科 4 年 藤井卓也

みのむしの会は奈良県総合医療センターNICU 部長の箕輪先生をはじめ、奈良県養護学校の先生方が主導し行なわれている会で、先生方は親御さんの相談に乗ったり、子ども達に動作療法を行ったりしております。活動は月に一度開催されており、学生はお邪魔させて頂く形で参加しております。学生の活動内容としては障害を持った子ども達と遊んだり、親御さんと話したりする事です。

年に一度、生駒市山麓公園ではみのむしキャンプが開催され、学生が子ども達をお風呂に入れたり、また夕食後には親御さんから育児で悩んだことや、今子ども達の成長をどう感じているか、等の普段の会ではあまり聞くことが出来ないお話を聞いたりします。今年のみのもむしキャンプでは、スタッフの先生方、会に参加する親御さんの間で今後みのむしの会はどのような風に継続して行われていくべきか、という話が出てきました。その中で、現在行なわれているみのむしの会の目的が発足した当時の目的と、ずれてきているのではないか、というお話が箕輪先生よりありました。

みのむしの会が発足した当時の目的としましては障害を持って産まれてきた子ども達がNICUを離れ、学童期までの数年間を中心にフォローし、子ども達の発達と両親の精神的面の成長を一緒に見守る事でした。そして子ども達が成長し親御さんと一緒に一人歩きが出来るようになったら、そのご家族はみのむしの会を卒業した生活を過ごしていく形をとられていたそうです。学生は当初のみのむしの会を通じて子ども達との触れ合い、親御さんの育児への葛藤、苦勞等、ご家族の想いを真摯に受け止め、考えるきっかけの場としていたと聞いております。

私がみのむしの会に初めて参加し始めた一年の春には既に、多くのご家族の子ども達が一人で歩いて、周りの子ども達と折り合いをつけながら遊ぶことも出来る、みのむしの会での手厚いフォローを受けずとも成長していくことが出来る子ども達が多く参加しておりました。学生の参加者もここ数年で毎回多くの学生が参加してくれるようになりましたが、子ども達も成長に従ってより活発になり殆どの学生が子ども達と遊び、あまり親御さんとお話できる機会は少なかったのだと思います。

以前より箕輪先生はその点を憂慮されていたようで、今回のみのむしキャンプを経て、みのむしの会が行われるようになった当初の目的に原点回帰し、ご家族に寄り添う事を目的とした“新しいみのむしの会”が2017年2月より開始されました。

新しいみのむしの会は毎月第二土曜日に開催され、活動内容としては午前中にスタッフの方々から講義を受けたり、午後から行なわれる会に参加する子ども達がどんな子どもなのか、の説明を受けたりします。午後からは親御さん達と先生方の相談や子ども達への動作療法を間近に見たり、親御さんと話しながら子ども達と遊んだりしております。

これは私個人の考えではありますが、社会医学研究会の活動の中でのみのむしの会は、ここ数年の“子ども達と触れ合いその中で子ども達の持つ色々な性格を知っていく(発達障害もその内の一つ)”活動から、“子ども達が障害を持って産まれてきたご家族から様々な悩みを聞き、それを通して学生の内に多くの事を考える”活動へと一転し始めるのだと感じております。まだ私自身も新しく始まった“みのむしの会”を知らない部分が多いため、参加を継続し今後詳しくご報告出来るよう勉強に励んでまいります。

これからも新しくなった“みのむしの会”をよろしくお願い申し上げます。

手話の会

医学科 4 年 植田駿

手話の会活動代表、医学科 4 回生の植田駿です。

今年の活動内容ですが、手話の単語の勉強だけだと面白くないと思ったので、単語の勉強以外にもいろいろなことをやりました。

例えば、手話歌がそうです。手話歌には幼少時代に触れた人も多いと思います。僕も小学校の時に『世界に一つだけの花』の手話歌を練習した覚えがあります。この手話歌ですが、やってみるとなかなか難しいです。童謡くらいのテンポでも反射的に手話が出るようにしていないと、ついていけませんでした。

特に難しかったのは「女々しくて」の手話歌ですね。手話歌をするのにまず「女々しくて」の歌詞を手話に訳すところから始めたのですが、これがまた困難が多かったです。口語と手話単語では、表現が違ったり、そもそも該当する単語がなかったりして苦労しました。ようやく出来上がっても、曲のスピードについていけなくて、習熟度がまだまだ足りないことを実感しました。

そんな中、手話の会に来てくれている学生が「女々しくて」の手話歌を練習して動画にとって見せてくれました。曲のテンポの速さに負けず、すらすら手話を繰り出していたので、相当練習してくれているなと感じました。これだけでも活動代表冥利に尽きます。

手話歌以外にも、「聾」を扱った本や漫画の紹介や貸し出し、場面別での手話単語練習（道案内、病院内など）、聾教育に関する話などを取り扱ひまして、多方面から「手話」を考えるようにしてきました。

手話と聞くと、耳が聞こえない人が言葉の代わりに使うジェスチャーのようにとらえている人が大半だと思います。しかしながら、厳密にはそうじゃないのです。手話には言語学的な文法もあって、聾以外の方も使いうる立派な言語なのです。その「言語」の背景には、聾教育や聾文化などがあって、逆に言えば、手話を学ぶことはそれらの背景を学ぶことにも繋がります。

僕自身、手話の会の活動代表をする前は何も知りませんでしたが、やってみると本当に色々なことを学びました。これらの学びを少しでも活動に参加してくれた方々に還元できていれば幸いです。

一年間、手話の会に参加してくれた方々には感謝の嵐です。まだまだ続けますので、これからもどうぞよろしく願いいたします。

なかよし保育園ボランティア

医学科 4 年 藤井卓也

なかよし保育園は親御さんがお迎えに来るまでの間、保育園で帰りを待つ子ども達と共に遊ぶ活動です。場所は奈良県立医科大学病院に隣接するなかよし保育園で、利用者は奈良医大に勤務されている方に限られております。

毎年の事ではありますが、子ども達の成長はとても早く、数年前に一人遊びをしていた子どもが皆と遊びながら、自分の意見を話すようになっていたり、肩背に子ども達を抱えるとその体の大きさ、重さに驚かされたりと、短期間ではあまり気づきにくい変化も多く参加する度に新たな発見がありました。

また今年には園長先生とスタッフの皆様との相談の上、例年は他の保育園で年に一度開催させて頂いている、ぬいぐるみ病院をなかよし保育園にて開催できることに至りました。その活動内容に関しましては他の学生が報告しているので、割愛させて頂きますが、医大なかよし保育園と社会医学研究会のつながりが一歩前進する、素晴らしい活動が行えることが出来ました。来年度からは、ぬいぐるみ病院に加えまして、また歯磨き教育などを別途開催できるのではないかと、等の話も相談の中で出てきており、次年度以降も関係者一同により良い影響につながるような、活動にしていけたらと、考えております。

参加している学生が大学で成長する中で同時かそれ以上の速さで成長していく子ども達の姿を見守ることが出来る活動だと感じております。単に短い期間で何度も活動に参加しても、久し振りに参加しても成長した子ども達と触れ合い、多くの気づきが得られる活動ですので是非皆様に一度ご参加いただけたらと思います。

最後となりますが、この場をお借りして、なかよし保育園の園長先生をはじめスタッフの皆様、ならびに学生の活動に心優しく活動に参加して下さる保護者の皆様、そして何より子ども達の皆、忙しい中参加してくれる学生の皆様に感謝を申し上げます。誠にありがとうございます。今後ともよろしくお願い致します。

夏のぬいぐるみ病院ボランティア

看護科 2 年 中谷真澄

活動日時：2016 年 8 月 30 日（火）

活動場所：ひかり保育園

活動を終えての感想：今年も、「手洗いうがいをしよう。」と「好き嫌いなく食べよう。」の二つをテーマにして活動を行いました。ぬいぐるみの診察をして、園児とお医者さんとのお約束で、「家に帰ってから、手洗いうがいをして、好き嫌いなく食べる。」ことを伝えました。また、「好き嫌いなく食べる。」ことをテーマにした劇（ペープサート）を見せ、歌に合わせて手洗いの練習をしました。今年も、奈良医大のマスコットキャラクターのしょうとくた医師君も来て、園児たちと触れ合いました。園児たちは、診察の時は、少し緊張した様子でしたが、包帯を巻いてもらったり、注射をしてもらったりしたぬいぐるみをみて、うれしそうにしていました。また、「お医者さんとのお約束をしっかりと守れるかな。」と聞くと、目を輝かせて「頑張る。」と答えてくれました。しょうとくた医師君を見て、歓声を上げたり、触れたりして楽しそうに遊んでいました。劇がおもしろかったという声が聞かれ、とてもうれしく思います。園児たちの病院に対する恐怖心がなくなり、健康への関心が増すことを期待しています。私たち部員は、いろいろと勉強させていただき、とても感謝しています。

冬のぬいぐるみ病院ボランティア

医学科 4 年 堀江きよみ

毎年夏に恒例のぬいぐるみ病院ボランティアは、ひかり保育園で行われますが、今回のこの冬のぬいぐるみ病院は 12 月 26 日、奈良県立医科大学病院付属のなかよし保育園にて行われました。

社医研の活動グループになかよし保育園ボランティアもありますが、そこでぬいぐるみ病院を実施したのは今回が初めてです。事前になかよし保育園の園長先生や主任の先生と何度か話し合いを重ね、保育園側の要望にできる限り応えられるように努めた結果、何点か初の試みをする事になりました。1 点目は、年上のクラスと年下のクラスで実施内容を変えたことです。年上のクラスでは「ぬいぐるみ病院」を実施し、年下のクラスでは「てあらい教室」を行いました。てあらい教室では、ひかり保育園でも歌った、手洗いの歌で正しい手洗いを子どもたちに楽しく学んでもらい、すぐに手洗い場で一緒に実践してみるという方法をとりました。ちょうどインフルエンザなどの感染症の流行する時期でしたので、きちんと手洗いをする習慣をつけることは予防にとっても重要なことだと思います。2 点目は、年上のクラスのぬいぐるみ病院で、子どもたちにもお医者さんの役をしてもらったことです。ちょうどよいサイズの白衣に身を包み、聴診器や体温計、お手製のぬいぐるみサイズのマスクで診察をこなしていく子どもたちは、笑顔だったり少し緊張気味だったり表情は様々でしたが、皆それぞれよい経験・学びになったのではないかと思います。

ぬいぐるみ病院ボランティアは、子どもたちにとっても医療系学生にとっても多くの意義のある活動ですが、私たち医療系学生が何らかの形で予防医療に貢献しようとする事は、将来、「公衆衛生の向上及び増進」に寄与すべき者として、大切な心構えの一つなのかもしれません。

小児科学習支援ボランティア

医学科 5 年 阿部咲良

本大学付属病院では、長期間入院する小学生及び中学生を対象とした院内学級を設置しており、学習やレクリエーションを行っている。しかし、高校生に対する支援体制は整っておらず、入院中の高校生は自身で学習を進める他ないというのが現状であった。そこで社会医学研究会では、本大学付属病院の小児科へ入院する高校生に対して病室で学習支援をするボランティア活動を平成 26 年より開始している。活動内容と今後の課題について報告する。

【活動状況】

学習支援ボランティアが開始された平成 26 年度、その翌年の平成 27 年度では 2 回にわたって計 4 名の支援を行った。本部活内でメンバーを募り、週の始めにその週の担当日を決め、放課後に 1 時間程度の学習支援を行った。支援内容や到達目標は患者の希望に沿って決定した。患者の体調や治療を最優先事項に、できる範囲で支援を行った。結果として 2 名は休学の後に、2 名は年度中に在籍していた学校へ復学することができた。

支援を行うにあたり、学生は病室へ入室する前に体温、感冒症状の有無を専用の記録用紙に記載し、マスク着用のもと、感染予防を徹底した。代表学生は病棟スタッフ及び患者の主治医と連携し、その日の患者の体調やスケジュールについての連絡を取り合いながら支援を進めた。

平成 27 年度の学習支援の後、小児科へ入院する高校生が少なかったため、学習支援のボランティア活動自体は休止していたが、より大きな範囲の人々に高校生の学習支援体制の必要性を理解してもらい、確立させるため、11 月 10 日の奈良小児保健学会にて活動や高校生の学習支援の現状を発表した。

また、今年平成 28 年 3 月より 1 名の高校生に対して支援を再開する予定である。

【今後の課題】

平成 26、27 年度では入院患者へ対しての学生の数が少なく、一人あたりの負担が大きいことが課題となった。小児科以外にも本学の付属病院には高校生は何人も入院されているが、学生側の人数が確保できないため、小児科の他に支援の範囲を広げることができないことが現状である。学生だけの支援では限界があるため、今年度のように、地域や県へ小中学生と同様の継続した支援が確立されるように働きかけながら無理のない範囲で学生による学習支援ボランティアを続けていくことが必要である。また、学生間や学生とスタッフ間の連携、引き継ぎが今後この学習支援ボランティアを継続させていく要となると考えられる。

花の家ボランティア

医学科 4 年 堀江きよみ

花の家は近鉄橿原線の橿原神宮前駅の近くにあるデイサービス施設で、私たちは主に土曜日に部員の都合の良い時間帯でお邪魔しています。花の家の利用者さんはご高齢の方が中心で、施設の中は一般の方のお部屋と認知症を持ってより見守りの必要な方のためのお部屋の 2 つに分かれています。私たちの活動内容は、その利用者さんとおしゃべりを楽しんだり、パズルやトランプで遊んだり、一緒に貼り絵のカレンダーを作ったり、麻雀などのゲームをしたりと非常に和やかなものです。お昼には利用者さんと一緒に、美味しくかつヘルシーなお昼ご飯をいただくこともできます。

花の家ボランティアは今から 6 年前に、地域健康医学政策教室教授の車谷典男先生や当時、橿原市役所 橿原市民協働課 課長補佐でいらした辰井保千代さん、花の家所長の濱田しま子さんをはじめとした多くの方のご協力・ご厚意により生まれ、奈良県立医科大学に通う学生として、地域の方との関わりを深めてもらえればという想いが込められているそうです。

今年度、私はあまり活動に参加できていませんでしたが、花の家に行くときはいつも認知症を持っている方のお部屋に行っています。そのお部屋の中でもコミュニケーションにほとんど問題ない方もいれば、少し意思疎通のしづらさを抱えていらっしゃる方もいます。円満なコミュニケーションをとることに難しさを感じることもありますが、利用者さんが「何を伝えたがっているのか」をきちんと受け止められるように努め、その思いを大切にすることが、利用者さんの安心・笑顔につながるのではないかと思っています。また、そのような態度は将来、医療者となった時にも生きてくるものでしょうから、これからも初心を忘れず、花の家ボランティアに参加していきたいです。先輩たちから引き継いだこの素敵な活動を後輩にも伝えていけるよう、新しい仲間の参加を心よりお待ちしております。

ホスピスボランティア

医学科 4 年 中森滉二

ホスピスボランティアは田原本にある国保中央病院の緩和ケア病棟『飛鳥』で月に一度のペースで活動を行っています。ホスピスとは治療が困難となった終末期の患者さんをひとりの人間として尊重し、人生の質(QOL)を維持・向上させるための施設です。ホスピスでは患者さんが残された時間をゆったりと過ごせるような空間が作られています。

病院という施設では、患者さんと家族以外は医療の専門家です。そのような日常生活からかけ離れた空間では、患者さんは医療者の想像以上の緊張を抱えています。そこに”適度に素人な人”としてボランティアがいれば、ささやかなことしかしていなくても、患者さんに安心感を与えることができると考えて活動をしています。

私たちは学生ボランティアとして、ホスピスが患者さんにとってより過ごしやすい空間となるようにお手伝いをさせていただいています。具体的な活動としては、リビングルームの大きな窓に季節ごとの飾り付けをしています。春には桜、夏には海水浴、秋には紅葉やハロウィン、冬にはクリスマスやお正月、節分などの飾り付けをしました。患者さんやそのご家族の方から「かわいい飾り付けやね。」などと褒めていただくこともやりがいを感じます。また、飾り付け押している最中に患者さんとお話をすることがあります。患者さんの方から話しかけてくださり、私たちから特別なアプローチをしなくても患者さんの話を聞くだけで、その方に感謝されることもありました。8月にはホスピスの夏祭りのお手伝いもさせて頂きました。この夏祭りではホスピスに入所している患者さんとそのご家族の方々を対象に、ホスピスの中庭やホールで様々な催し物が開かれました。

医療者自信のメメント・モリ（死を想うこと）や、いのちとは？という問いかけは、医療という科学の分野に留まらず、文化的、宗教的、社会的学びへと広がります。その広がる学びがあつてこそ、私たちは厳しい臨床の現場をひとつひとつ大切に抱えながら、病む人と家族をケアし、自分自身も燃え尽きないで働き続けられる強さを身に付けられるのではないのでしょうか？これらを体験し、学ぶ手段の一つがホスピスボランティアだと思い、私は活動に参加しています。

ホスピスボランティアでは月の初めに参加希望者の予定を聞き、それに合わせてできるだけ多くの方が参加できるように活動日を決めています。少しでも興味のある方は、是非参加してみてください。

医大アート展ボランティア

医学科 4 年 堀江きよみ

医大アート展は、正式な名称を「特別支援学校と病院を結ぶ！奈良県立医科大学附属病院アート展」といい、“医療・就労・アートを一体的につなぐ！”ことを目指して“奈良県立医科大学・NPO 法人ならチャレンジド・奈良県立高等養護学校”の3つの団体が主催し、この度初めて開かれました。8月22日から28日までの7日間、本学附属病院のBC棟2階廊下にて県立特別支援学校の生徒のアート作品を展示し、その他ワークショップも開催していました。開催中は連日100名以上もの患者さん・患者さんのご家族・医療者の方々が来場する賑わいでした。

社医研部員の活動としては、事前に奈良医大の障害者雇用促進係の方やならチャレンジドの代表の方、そして養護学校の生徒さんと会って打ち合わせを何度か行い、アート展前日には展示物の搬入を一緒にして、また当日は受付やワークショップのお手伝いなどをさせていただきました。私は光栄にも初日のオープニングセレモニーにて、養護学校の生徒2人と司会をさせていただくこともできました。

活動に参加してみて、一番印象に残ったのは、展示されていたアートたちのもつ力強さです。アートは絵画だったり、粘土細工だったり形こそ様々なものでしたが、それらはどれも繊細で、そして作った人の息吹が感じられるような力作ばかりでした。アート展に訪れたある患者さんは、次の日に大きな手術を控えて入院されていたのですが、皆のアートを見て、「勇気をもらった」と言って帰っていきました。これらの作品には特に人に元気を与える力が宿っているのかもしれない。養護学校の生徒さんと一緒に活動していて感じた、彼らの純粹さ・ひたむきさもきっとこのアートの力に繋がっているのだと思います。

IFMSA

医学科 4 年 中尾美穂

社会医学研究会は IFMSA-Japan の団体加盟をしており、積極的な活動が可能となっています。

IFMSA-Japan の母体である国際医学生連盟 (IFMSA: International Federation of Medical Students' Associations) は、WHO (世界保健機関)、WMA (世界医師会) を始め、様々な国際機関、UNESCO や UNICEF などの国連機関と公式な関係を結んでいる唯一の医学生団体です。119 の国と地域から 127 団体が加盟し、130 万人以上の医学生が参加しています。

臨床交換留学、基礎研究交換留学、公衆衛生、性と生殖・AIDS、人権と平和、医学教育などの分野で活動しており、世界各国で様々なプロジェクトやワークショップを運営しています。医学雑誌 THE LANCET では、国際保健教育への取り組みが論文の中で大きく紹介され、論説でも触れられています。

特に本大学では、交換留学と国際医療へのアプローチ、Training の活動に力を入れています。

1 カ月もの期間海外の研究室や病院で基礎研究・臨床実習ができる交換留学では、様々な国の医学生が奈良県立医科大学を留学先として希望しています。そして本大学の学生も、これまで様々な国へ留学してきました。次の夏にも人気国での病院臨床実習が決定しています。また、“国際的な視野で医療の道に励む”という意識の下、関西の他大学医療系学部と合同でイベントや勉強会も開いてきました。時には海外の医学生と医療について本気で討論することもあり、海外のことを知るだけでなく、改めて日本の医療について考え国際的視野で見つめ直す機会となりました。自分が今何をすべきか、何ができるのかを考え、それがさらに国内でのみならず海外へと広がるということを体験しました。

Training という活動も大変活発です。ノンテクニカルなスキルを磨き、それを Trainer として大勢の前に出て魅せ、実際に参加者 Trainee にロールプレイなどで実体験してもらい……、そうすることでスキルをその場で実践し向上してもらおうという活動です。本大学には、私をはじめ大勢の公式 Trainer がおり、積極的に活動しています。

10 月の 3 連休には 14 回目の「日本総会」が行われ、本大学の学生も参加しました。一年に一度、日本全国から医療系の学生が 400 人以上集まる IFMSA-Japan 最大のイベントであり、IFMSA-Japan の活動を一つに凝縮させた、密度の高いものです。全国から集まった熱い仲間たちと共に過ごす 3 日間は濃密でとても刺激的。様々なフィールドで活躍される特別講師の先生によるレクチャーは大変

貴重な機会でした。

様々な活動をしている IFMSA-Japan には、きっと皆様も魅力を感じるものがあると思います！

AMSA

医学科 3 年 安達有博

◆AMSA とは？

1985 年に AMSA (アジア医学生連絡協議会、Asian Medical Students' Association) は正式に発足され、現在では 22 の国・地域 (オーストラリア、バングラデッシュ、カンボジア、香港、インドネシア、日本、韓国、マレーシア、ネパール、パキスタン、フィリピン、台湾、タイ、パプアニューギニア、イギリス、中国、ネパール、モンゴル、ニュージーランド、トルコ. etc) が参加しています。アジア各国の医学生と共にアジアの保健医療の向上を目指し、ヒューマンネットワークを作りあげていくことを目標としています。主な活動としては年に 2 回の国際会議や交換留学を行っています。AMSA Japan もその支部の 1 つであり、独自に国内交流会、会議の報告会、他団体との共催イベント、新歓、追いコンを行っています。

◆2016 年 1 月から 2016 年 12 月までの主なイベント活動

1. EAMSC (東アジア医学生会議) in Taipei

2016 年 1/24~1/29 の日程で、インドネシアにおいて第 29 回東アジア医学生会議が開催されました。“Medical Care In the Future - When Medicine and Technology Meet Humanity” というタイトルで、アジアを中心に多国籍の医学生が一堂に会し、基調講演、プレゼンテーション、ディスカッションなどのプログラムを通じて先進医療に対する理解を深めました。また、観光や文化交流のプログラムを通して、他国の医学生との交流を深めることが出来ました。

2. 新入生歓迎イベント

2016 年度は、東北・関東新歓 (@東京女子医科大学)、関西新歓 (@大阪医科大学)、中四国・九州新歓 (@岡山大学) が行われました。

3. 春の国内交流会

6月には、東京女子医科大学において春の国内交流会が開催されました。このイベントは、AMSA Japan の目玉イベントである国内の医療系学生を対象とした交流会であり、テーマに沿った講演、ワークショップ等を行うとともに、全国の医療系学生間の交流を図りました。今回は東京女子医科大学での開催となり、テーマとしては「Social Determinants of Health」を掲げました。この領域に精通されている講師の先生をお招きし、参加者はこの講師の先生によるご講演、そしてワークショップを通して、上のテーマに関して学びを深めました。

4. AMSC(アジア医学生会議) in philippine

6/28~7/5の日程で、においてアジア医学生会議が開催されました。『Beyond Our Clinic-Social Determinants of Health』というタイトルで、健康の社会的決定要因について学びました。アジアを中心に24の地域から500名近い医学生が参加し、日本人医学生も会議に赴きました。参加者は、基調講演やグループメートとのディスカッション等を通じて健康の社会的決定要因への理解を深めるとともに、観光などの文化交流プログラムを通じて、アジア各国の医学生との交流を深めました。

5. 秋の国内交流会

12月には、広島大学において秋の国内交流会が開催されました。今回のテーマは『気候変動と医療』というものでした。交流会は4つのWSによって構成され、参加者は気候変動の医療に与える影響に関する学びを深めました。全国各地から医学生が参加して、テーマに関して活発に議論が行われ、また懇親会等を通じて医学生同士の交流を深めることが出来ました。

学祭 模擬店

医学科 4 年 堀江きよみ

10月29日（土）と30日（日）の2日間、今年度も学祭両日に渡り、社医研として模擬店を出店いたしました。昨年の模擬店で販売したのは焼きおにぎりでしたが、今年はチヂミを調理・販売しました。社医研では毎年、売るものを変更しているため、調理・販売方法をその都度考え直さなければいけない分、苦勞もありますが得られる達成感ややりがいは非常に大きいものです。今回、私自身、これまでチヂミを作ったことがありませんでしたので、多くの部員と協力し合っ、お客様に喜んでいただける品に仕上がるよう励みました。結果として、1日目も2日目も両日ともに早々に売り切れてしまうほど大盛況で、1日に何度もチヂミを買いに来てくださったご家族さんもいらっしや、とても嬉しかったです。利益も出すことができ、微力ながら社医研の部費に貢献することもできました。

社医研では、一つの部活とはいえいくつかの活動のグループに分かれて活動しているため、普段部員で集まる機会はそう多くはありません。そのため、このように活動グループを超えて一つのことを成し遂げるとい過程は楽しいだけでなく、社医研として大きな意味を持つものだと思います。学祭で模擬店を開くということは部としての結束力を培うには重要なイベントなのかもしれません。学祭は毎年、医学科5年と看護科2年が主催することになっているため、私は来年、社医研の模擬店をあまり手伝う余裕がないのかもしれませんが、もし後輩が出店してくれたならきつと足を運びたいと思います。

あとがき

今年で10回目の社会医学研究会の活動報告書の発行となりました。今回も各活動の代表者の方にご執筆をお願い致しました。快くお引き受けいただきありがとうございます。このように毎年各活動の様子をまとめることは、いつもお世話になっております嶋教授、OB・OGの方々にも今の社会医学研究会の様子を報告すると共に、新しくできた活動を含め、自分のしている活動以外のことが見えにくい中で、現役部員に対し様々な活動を知らせていき、部員の輪を広げて社会医学研究会をますます発展させていく良い機会になっていると思います。

今年度は休会していた手話の会が復活して盛んに活動をし、医大近くのなかよし保育園でもぬいぐるみ病院の活動を行い、また医大アート展のお手伝いという新たな活動を始めるなど、活動の幅が大きく増えた年になりました。社会医学研究会は様々な人と交流し様々なことを学ぶことができる場所です。私自身、いくつかの活動に参加し、たくさんの人と関わり、たくさんを学ばせていただきました。これからも交流の場、学びの場を増やしていけるよう、社会医学研究会の活動の幅を増やし、さらに多くの部員が気持ち良く活動していくために、来年度も微力ながら尽力して参りたいと思います。

今年は9名の先輩方がご卒業されます。先輩方がこの社会医学研究会に残して下さったものを大事に伝えていけるよう、今年度の32人の新入生、また来年度入学してくる人達と共に、部員一同いっそう励んでいかなければならないと思います。

最後に、社会医学研究会の活動を運営するにあたって、嶋教授はじめ、OB・OGの方々、先輩方、副部長の安達、後輩のみなさん、多くの方々に支えていただき本当にありがとうございました。今後ともご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

2017年3月
医学科3年 潮見吉紀